2026 年 3 月 5 日（木）
教育学部教務委員会

2026 年度版　教科教育Ⅱの紹介

「国語科教育Ⅱ」

１．授業概要

「国語科教育Ⅱ」は、「国語科教育Ⅰ」で学んだ国語科教育の基本的な知識を土台として、より実践的な内容を、模擬授業などを通じて体験的に学びます。
国語科教育は、物語や説明文を読んで読解をするといったイメージがあるかもしれません。しかし実際には、ノート指導や意見文指導や読書感想文指導、硬筆・毛筆などの書くことの指導もあります。また、話す・聞く指導として、発表、話し合い、合意形成、聞き取りメモなどの知識や技能も子供に教える必要があります。さらに、漢字・平仮名・ローマ字などの文字指導、基本的な文法・敬語指導、現代詩、短歌、俳句といった詩歌指導、そして「春はあけぼの」や「論語」などの古典指導も指導事項になっています。
小学校のすべての教科の中で、もっとも指導時間数が多いのが国語科です。その内容も上に挙げたように様々な種類があり、「教科書を読めば理解させられる」というものではありません。教師がその知識や技術を用い、児童がそれらの言語技術を「使えるようにする」ことを目標としています。
　おそらく学生のみなさんは、「国語はなんとなくできる」と考えておられることでしょう。しかし、受験で問われる内容は、国語科のほんの一部でしかありません。子供たちが将来にわたって社会生活を幸せに過ごせるように、コミュニケーション能力、論理的思考力や情感力、自己制御に必要な自己理解力や共感力を育てることも国語教育の大切な指導事項になってきます。「教科概説国語」や「国語科教育Ⅰ」だけでは到底時間が足りません。ぜひ良き教師になるために「国語科教育Ⅱ」も学んでください。

２．「国語科教育Ⅱ」の特徴

　先日、本学の３年生が「もうすぐ教育実習に行かなければならないのに、模擬授業経験が圧倒的に少ない！」と嘆いていました。教育実習が終われば今度はすぐに教師として一人ぼっちで教壇に立たねばなりません。授業経験は少しでも多いことにこしたことはないのです。（塾講師の経験は、学校教育の国語の授業にはほとんど役に立ちませんしね。）
　「国語科教育Ⅰ」は、国語科の基礎的な内容を学び、学習指導案の書き方を学びます。模擬授業もしますが、模擬授業に十分な時間を割くことはとてもではありませんが無理だということはご理解いただけるのではないでしょうか。
　しかし「国語科教育Ⅱ」は違います。基礎は「Ⅰ」でできていますから、「Ⅱ」は模擬授業に十分な時間を使うことができます。しかも、「Ⅰ」に比べて「Ⅱ」は受講生が少ないため、少数精鋭でしっかりと講師の先生から指導を受けることができます。日本を代表する実践家の方々から、豊富な知識と経験を踏まえた細やかな教えを受けることができることは、一生の宝になります。この縁をきっかけに、現場に立った後も指導を仰ぐことができるかもしれません。控えめに

言っても、「国語科教育Ⅱ」を受講しないという選択は、良き教師になる夢を抱く若者にとっては、目の前の金銀財宝を自らドブに捨てるようなものだと思います。

３．その他（特記事項等）

「自分は中・高の国語以外の教員になるから国語はいらない」という考えはあるかもしれません。しかし、その教科は何を使って教えるのでしょうか。国語ですよね。どのような教科であっても国語を使わずに教えることはできません。また児童・生徒指導も、児童・生徒理解も保護者対応も、言葉が大切な鍵になります。「国語」について少しでも多くのことを学ぶことが良き教師への近道です。「国語科教育Ⅱ」の受講を望みます。

「社会科教育Ⅱ」

１．授業概要

「社会科教育Ⅱ」では、概ね、次のようなことを講義とワークショップ形式で行っていく。

1 「社会科教育Ⅰ」を踏まえ、学校教育における社会科教育の意義の確認
2 子供理解の重要性の確認
3 発問づくりのセオリーの習得
4 指示と説明のセオリーの習得
5 教育内容と教材の峻別の大切さの確認
6 見えるものから見えないものへ－教材研究から授業づくりへの手順について－
7 社会科の授業過程の確認
8 教師の立ち位置について
9 板書の仕方について
10 机間指導の仕方について
11 授業づくりの鉄則
12 今求められている授業とは
13 そもそも学習指導案とは?
14 共同指導案作成とその批評

このように、現場に出た際に活用できる授業技法を中心に教授する。さらに習得した授業技法をケーススタディなどを取り入れながら活用する場面を設定し、実践的な講義を行う。

２．「社会科教育 II」の特徴

「社会科教育Ⅱ」では、実際に学校教育現場に出た際に活用できる授業技法を中心に教授する。さらに、ケーススタディなどを取り入れながら習得した授業技法を活用する場面を設定し、実践的な講義を行う点が、「社会科教育Ⅰ」との違いである。また、授業技法は、社会科固有の授業技法の紹介だけでなく、他教科にも活用可能な汎用性の高い授業技法をも紹介する。それ故、社会科教育に限らず、学校教育における授業づくり全般に資する講義になる。

「算数科教育Ⅱ」

１．授業概要

算数科の授業を実施する上で必要な事柄は多岐にわたりますが、その中でも基本的なものに学習指導案の作成があります。この学習指導案は詳細の程度に応じて、Ａ４で１～４枚程度の略案とより詳細な細案とに分けて考えることができます。本授業ではこの学習指導案の作成を目標に、それを補完する意味で模擬授業を実施していきます。結果として略案から実際のやり取りを具体的に想定する能力の育成を図っています。

２．「算数科教育Ⅱ」の特徴

「算数科教育Ⅰ」では教育実習において授業準備のための学習指導案の作成に重点を置きながら、算数科における指導方法の習得に重点を置いています。一方、「算数科教育Ⅱ」においては、児童の実態に応じた指導力を育成する目的から、様々な教育課題を意識しながら、より詳細な学習指導案の作成に重点を置いています。例えば、算数科を取り巻く課題として、日常生活における算数科の学習成果の科用の促進、数学的な表現力の育成、算数科の練り上げにおける協働的な学びの充実などがあります。１点目の活用の促進は、算数科の学習指導案における問題の工夫改善として顕在化し、結果として算数を学ぶ関心や意欲が向上すると期待されます。２点目の表現力の育成は、算数科の学習指導案における多様な解決の担保として顕在化し、結果として問題解決力の伸長が期待されます。３点目の協働的な学びの充実は、算数科の学習指導案における練り上げ指導の改善として顕在化し、結果として概念形成に多大な貢献をすると期待されます。様々な教育課題を意識した学習指導案を作成する教師としての資質・能力を育成することで、より実践的な指導力の習得を目指しています。

「理科教育Ⅱ」

１．授業概要

前半（第 1～5 回）は講義形式の授業となり、「理科教育Ⅰ」で学習した小学校理科の問題解決型の授業づくりの復習に加えて、理科授業における ICT 科用の方法、指導案（細案）の書き方、理科実験の安全管理などを扱います。後半（第 6 回～15 回）は履修者の模擬授業となり、小学校 3～6 年生の A 区分（物質・エネルギー）、B 区分（生命・地球）を割り振り、自分で単元を選んで行います。模擬授業後は、その授業の検討会を行います。

２．「理科教育Ⅱ」の特徴

「理科教育Ⅰ」ではグループ（4 名程度）で模擬授業を行いましたが、「理科教育Ⅱ」は１人で行います。模擬授業の時間は履修者数にもよりますが、45 分間が基本となります。教育実習に行く前に、1 人で模擬授業を行う経験をしておくことは大切だと思います。また、電子黒板を利用したデジタル教科書の活用やその他の ICT 活用を積極的に行ってもらいます。

３．その他（特記事項等）

理科専修の学生との混合クラスとなります。

「音楽科教育Ⅱ」

１．授業概要

小学校や中学校の教員をめざす学生が、歌唱、器楽だけでなく、音楽づくりや鑑賞の分野についても学び、自分で独創的な授業をつくるための力を身につける授業です。具体的には、多種多様な音楽活動（総合的学習やインクルーシブ学習）、デモンストレーション、模擬授業などをとおして、学生同士で話し合い、より良い授業を行うための改善点を考え、学びを深めると共に、現在学校現場で求められているアクティブラーニングの指導法、主体的・対話的・協働的で深い学びへと子ども達を誘うコツ、授業の展開方法を身につけていきます。更に、ICT を活用した、新しい「音楽づくり」や「鑑賞」活動の実践をとおして、アート思考や創造的思考、多様な表現方法を自ら体験することで、幅広い実践指導力を身につけ、人間性豊かな教員をめざします。

２．「音楽科教育Ⅱ」の特徴

「音楽科教育法Ⅰ」では、主に表現領域の「歌唱」（特に共通歌唱教材）と「器楽」（主にリコーダー）を中心に、授業づくり、指導案の書き方、具体的な指導法について学んできました。「音楽科教育法Ⅱ」では、表現領域の「音楽づくり」「器楽」（和楽器を含む）、鑑賞領域の「鑑賞」、さらにアンサンブルや ICT を活用した授業づくりについて扱います。新学習指導要領に基づき、「主体的・対話的・協働的で深い学び（アクティブラーニング）」の具体的なアプローチや、個別最適な指導法について理論と実践を往還しながら学び、授業展開力の向上を目指します。

３．その他（特記事項等）

予測不可能な時代において、自分達にとって価値ある未来をつくっていかなければならない子ども達にとって、創造力や表現力、AI にはできない「人間ならではの力」（社会的情動スキル）の育成は、今後ますます大切になってくるでしょう。音楽科では、見えない音を自分なりにつかみとり表現していきます。このアート思考や創造的思考が学校教育においても注目されはじめています。

「音楽が大好きで、子ども達にも、そんな音楽の楽しさや面白さ、音楽の魅力を伝えたい。」と思っている学生さんに積極的に参加していただきたい。一人ひとりの個性を活かしながら、授業実践力をアップしていきましょう。（備考：授業では、PC かタブレットのアプリ、いろいろな楽器を使用します。）

「図画工作科教育Ⅱ」

１．授業概要

「図画工作科教育Ⅰ」の内容を踏まえ、図画工作科における様々な指導内容の教材体験を通して、各指導内容に関する理解を深めるとともに、それに基づいた指導計画の作成と模擬授業を行い、授業実践力を高める。

２．「図画工作科教育Ⅱ」の特徴

「図画工作科教育Ⅰ」では、学習指導要領に基づく学習計画（学習指導案）の作成に重点を置き、

図画工作科教育の課題や美術教育の変遷、児童の発達段階と表現、表現領域と鑑賞領域の教材体験、教育評価のあり方などを全般的に学びましたが、「図画工作科教育Ⅱ」では、「図画工作科教育Ⅰ」の学びを土台とし、より多様な材料や用具を扱う表現領域「造形遊び」「絵画」「立育」「工作」の教材体験と鑑賞領域「対話型鑑賞」による体験を通して、より幅広く実践に生かせる教材について学びます。それらを十分に生かし題材研究を発展させた学習計画により、授業に必要な参考作品の製作、導入に有効な掲示物の作成を経て模擬授業を行います。個々で模擬授業を行い、研究協議の振り返りを通してより授業実践力を高めます。

「体育科教育Ⅱ」

１．授業概要

本授業では、小学校体育において児童が安全かつ主体的に学習科活動に取り組むために必要な知識と指導方法を習得します。具体的には「体育科教育Ⅰ」で学んだ運動の特性を踏まえて、学習指導案を作成し、科目担当教員からの指導助言を受け、学習指導案をブラッシュアップして模擬授業を行って頂きます。その後、クラスで模擬授業についての検討会を行い、良かった点や改善点を共有します。授業実践能力及び課題解決能力の育成を目的とします。

２．「体育科教育Ⅱ」の特徴

「体育科教育Ⅰ」では、「体育科の授業づくり」の教師力を体得するため、まず、「小学校学習指導要領解説体育編」の内容の理解、運動特性を享受させる授業計画、教材・教具の工夫、情報機器の科用方法などの基礎知識を習得しました。そのうえで、模擬授業を通しそれらを実践力へと高めました。しかし、履修者数が多かったり、模擬授業にあてる時間が少なかったりし、「実践力へ高める」は充分ではありませんでした。

そこで、「体育科教育Ⅱ」では「体育科教育Ⅰ」に比べ模擬授業時間数を増やし、実践力の強化を図ります。また、授業観察力の習得も目指します。言うまでもなく、「他者（他の先生）の授業から学ぶ」力は教師力の向上に有益です。また、多くの単元を扱うので、種目、教場や気温による準備運動の違い、整列の仕方、児童が技能を習得のための補助の仕方など細かいところも学ぶことができます。体育の授業では教え方を間違えると命に関わることがあります。例えば、跳び箱運動で「開脚跳び」と「台上前転」を行う場合、練習の順番を間違えると大きな事故につながることがある事を知っていますか？ このようなことも適宜学んでいただきます。

３．その他（特記事項等）

子どもにとっては「楽しい体育」である事が大前提ですが、教員はそれを踏まえて様々な視点からの「体育の授業づくり」が必要となります。運動特性を踏まえた安全な授業を行うことは言うまでもありませんが、「運動が苦手な児童も楽しめる授業」「見通しを立てて学ばせる授業」、「幼保小の連携を意識した授業」、「自分の走り方を分析する探求的な授業」、「保健と体育を連動させた授業」など、様々な授業づくりがあります。「体育科教育Ⅱ」では、このような視点から模擬授業を行ってみることもできます。

また、体育科は、教室で行われる教科と異なり、広いスペースで子どもが動き回ることが前提と

なります。「子どもの動かし方」「子どもの見守り方」さらには「安全を確保する場（教場や教材・教具）の管理 」といった教師力が必要となります。模擬授業時間数が増える「体育科教育Ⅱ」では、これらも深く学ぶことができます。小学校教員を目指す方は履修することをお勧めします。

「家庭科教育Ⅱ」

1. 授業概要

家庭科は、生活をよりよくするため、実践的・体験的に知識や技能を学ぶと共に、生活の中から課題を見つけ解決策を探る思考力や判断力を育む教科です。実習や体験活動を多く取り入れることで授業は活性化し、児童は楽しく学ぶことができます。しかし、単に実習や活動を行うだけでは深い学びとはいえません。そこで「家庭科教育Ⅱ」では、「家庭科教育Ⅰ」で扱えなかった題材や教材を取り上げ、先進的な授業実践事例の紹介なども含め、楽しくかつ深い家庭科の学びを探っていきます。実習や実験などもできるだけ採り入れ、実践的に教材研究や授業づくり、模擬授業を行います。

2.「家庭科教育Ⅱ」の特徴

「家庭科教育Ⅰ」では班の人数やメンバーを教員側で決めていましたが、「家庭科教育Ⅱ」では、苦手とする分野や深めたい題材について課題意識を持って取り組めるように自由度を高めて行います。受講生の希望により教科横断的な内容を意識した授業についても扱います。

3. その他（特記事項等）

家庭専修生は専門科目の授業で多くの実験・実習を行う機会がありますが、他専修生にはその機会がほとんどありません。「家庭科教育Ⅰ」では人数の制約があり難しかった実習を取り入れた模擬授業も「家庭科教育Ⅱ」では可能になります。子どもたちの「生きる力」を育む家庭科を得意教科にしたい人、実技を教えられるか不安がある人、実習を含む授業方法について学びたい人などに履修をおすすめします。

「英語教育Ⅱ」

小学校では，中学年で年間３５時間の「外国語活動」が必修化され，高学年では，年間７０時間の「外国語」が教科化されています。低学年においても，年間 10 時間以上の「英語」の時間を置いている学校は少なくありません。専科教員が配置されている学校もありますが，全国的にみると低学年，中学年の英語の授業は担任教師が担当することが多いようです。

みなさんは、「教科概説（英語）」の授業を通じて、「英語」という言語について、言語学、応用言語学、言語文化といった多角的な視点から基本的な知識を学びました。また、「英語教育Ⅰ」では、学習指導要領の内容、第二言語習得理論、異文化間コミュニケーション、評価、教材・カリキュラム開発等、英語の指導者として身につけておくべき基本的事項を学びました。ただし、残念ながら、授業実践能力に関わる模擬授業の時間を十分に持つことはできなかったのではないでしょうか。

「英語教育 II」では、「英語教育 I」で得た知識や技能を基盤とし、実際の授業作りや授業実践に必要な資質・能力の発展的な育成を目指します。検定教科書や文部科学省作成の共通教材に応じた学習指導案の作成、模擬授業、振り返り（指導と評価の一体化の在り方の確認）、必要となるクラスルームイングリッシュの習得、教材・教具の作成に取り組んでもらいます。

英語の授業は，日本語を用いて指導する他の教科とは異なり、英語力が必要であり、他の教科とは違った指導の難しさがあります。苦手だからこそ逃げずに、挑戦する姿勢を持ちましょう。英語の授業に必要となる指導力、教材開発力、そして英語力をしっかりと身につけることが大切です。現場に出た時みなさんのほとんどが「英語」の授業を担当することになります。保護者や同僚から信頼され、英語の授業を安心して任せられる教師になることを目指しましょう。

「英語教育 II」を履修して、「文教大学卒の教員は、英語の授業も良い授業をするね。」と評されるほどの力を身につけてほしいと願っています。

「生活科教育Ⅱ」

１．授業概要

本授業では、生活科と他教科及び学際的な領域との関連性に着目したカリキュラム開発にチャレンジします。

まず、「こんな科目があったら楽しいだろうな」と思う活動を自由に考えて発表し合います。ここでは既存の科目にとらわれずに、今までの学校教育の中では考えられなかったような、面白くて子どもが喜びそうな活動をぜひ発案して下さい。

次に、国内外のユニークな教育実践を収集し、発表し合います。日本に限らず世界中の学校では、どのような実践が行われているのかを見てみましょう。世界には皆さんが思いにもよらない実践がたくさん存在していることでしょう。さらに、授業担当者からも「世界でたった一つのドラマ」を紹介したいと思います。これはいったいどのようなドラマなのか、楽しみにしていて下さい。

最終的には、みなさん自身が、世界でたった一つのオリジナルカリキュラムの開発にチャレンジします。カリキュラムの開発にあたっては、子どもたちが実践することが前提ですから、教材研究の一環として、ぜひ皆さん自身にも考案したカリキュラムを体験していただきたいと思っています。

日本中、そして世界中のカリキュラムを見ることは、きっとみなさん自身の創造力を掻き立てるきっかけになることでしょう。

２．「生活科教育Ⅱ」の特徴

「生活科教育Ⅰ」では、授業の基本的な考え方、進め方について模擬授業を通して学びました。「生活科教育Ⅱ」は模擬授業から離れて、皆さん自身のカリキュラム開発のための発想力や創造力を培う時間です。授業は、皆さん自身が創っていくのです。担当教員もその一員です。また、生活科と総合学習は同じ領域であるため、3 年生以降から中・高まで見通した「総合的な学習（探究）の時間」まで含めてカリキュラム開発にチャレンジしたいと思います。

生活の実践は、まさしく自分の「生きること」なのです。教師も子どもと共に成長を実感できる、ぜひそんな素敵な時間を共有できたらいいと思います。

３．その他（特記事項等）

「生活」は自分と他の事象との関係性を広げていく科目です。その活動には、子どもと教師が創っていく世界でたった一つのドラマがあります。どんなドラマになるか、それはやってみるまでわかりません。笑いあり、涙あり、失敗もあれば喜びもあふれている、そんなドキドキ、ワクワクした活動を子どもと一緒に創っていくことができたら最高だと思いませんか。